

武德成業

六十一

内閣文庫	
番號	和 15251
冊數	63 ( 61)
函號	150 12

内閣文庫			
五〇	五二	五	和
四	三	一	書
架	冊	號	類

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

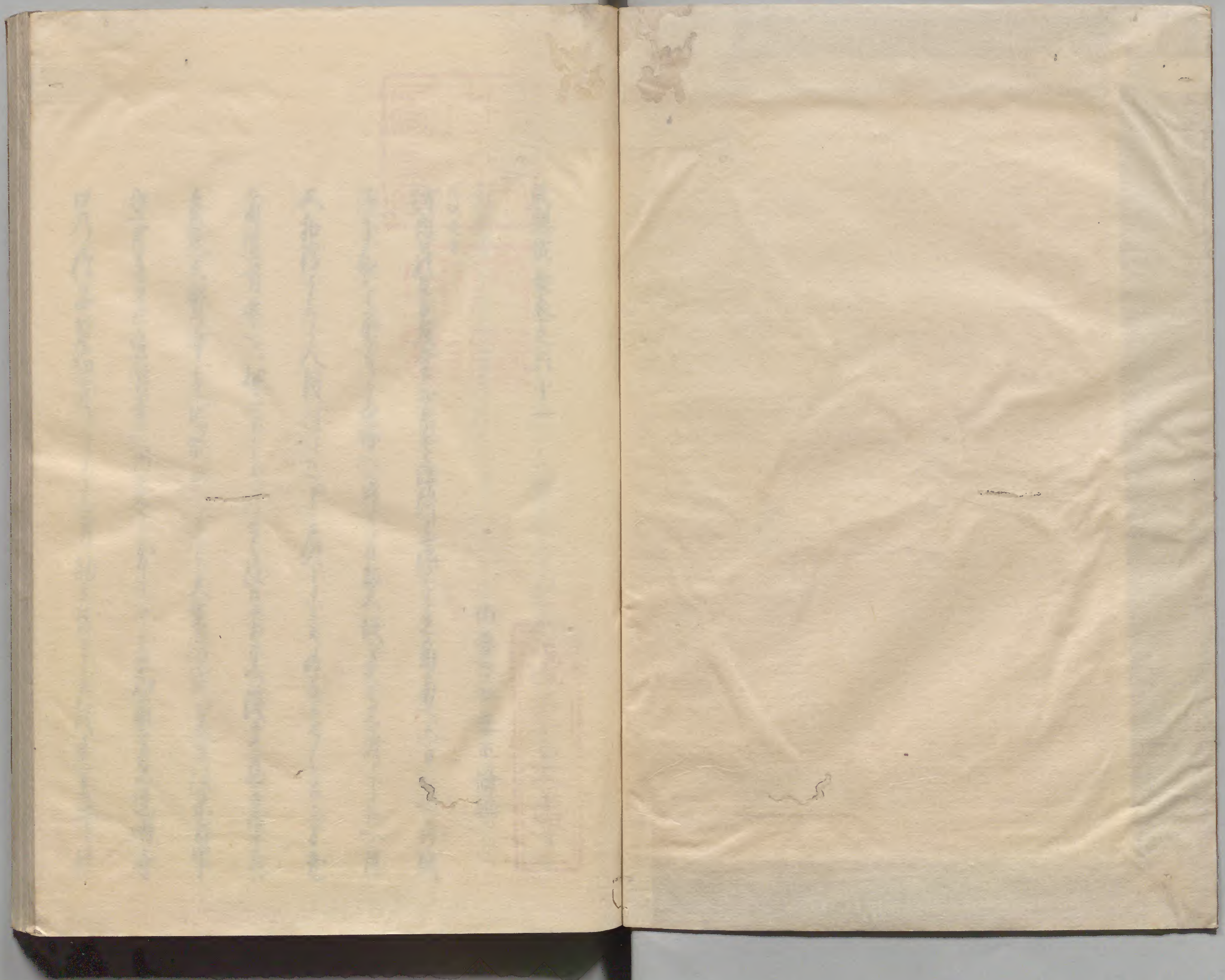
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





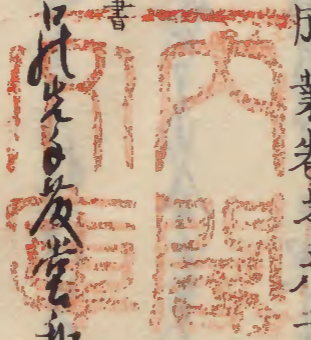




武徳成業卷之六十一



大坂覺書



河内日輪山及堂和泉寺跡所之塚を之角南へ六日の院を築

跡下地を形り之塚へ歸り日輪山大坂方を足後一里一尺

大和橋より人殺山見へ中野山とてその石をくわく身元

角道州寺へ押す一と許すは日輪山渡之跡を中野山

久尾久寶寺とて地形をくわく大軍の武とを以て自中野

山をくわく只道州寺へ山をくわく中野山和泉寺とて道州寺

口乃所子見切なり一と身元をくわく一は出言并此

淺草文庫

伯耆守加藤正脩編



南乃山へ来た方へ道明寺目のやに見へし川原を序  
山へし是より女所へと申すはくくり方ありしよし未  
に城は左右下とすと一橋を初例の合のすすれ  
曾押へ鐵板切鐵板をいふ係と申す六所常の如く相乃  
物見酒井子左衛門へ引合は酒井子左衛門と道明寺口と  
後及又急出りし中作の事よし人取事よしと申す  
此方より北は北の水野日向寺行進西家より押出し  
後炮せし合者よしと申す酒井中左衛門といふ  
人取は酒井中左衛門の道より待てる人酒井子左衛門

流和の事よしと申す一橋寺と并山の向より一橋寺を  
以て酒井中左衛門見まは八尾堤より若江より小村長門  
勢より斗よりと申す馬と申すはくくりし酒井中左衛門を  
侍よりと申すはくくりし酒井中左衛門を侍よりと申すはくく  
押出しは仁徳の侍を鐵板よりと申す道明寺へ押出  
人取を初よりと申すはくくりし酒井中左衛門を侍よりと申すはく  
寺より後炮より類よりと申すはくくりし酒井中左衛門を侍よりと申す  
はくくりし酒井中左衛門を侍よりと申すはくくりし酒井中左衛門を侍よりと申す  
可はれいしと申すはくくりし酒井中左衛門を侍よりと申すはくくりし酒井中左衛門を侍よりと申す







かけおく横尻よりよく押上る所のすべりしを西郡堂  
振きしそりし由より南の二階由し端より北を  
かきししを南の二階由し端より北を  
仁右衛門所はまき宮内様御殿と矢尾の海江と西向の北  
堂と目録を記ししに歸ししに是堂人奴  
一所ししを南の二階由し端より北を  
私之 御寺御殿と新築との強と古来のものしに日中  
あまのりより降し終て御寺御帳とてのりしに  
けはまきし目録ししは今朝の塚とて終る御寺御

中より万本 裁判 せしむるに古来のものしに  
横り 由りしを南の二階由し端より北を  
ししを南の二階由し端より北を

天元實記

及堂家此を記ししに南の二階由し端より北を  
さる虎渡四 御寺御帳とてのりしに  
らきししを南の二階由し端より北を  
場中ししを南の二階由し端より北を  
すれししを南の二階由し端より北を  
各御寺ししを南の二階由し端より北を















南へ進みけり能員十八村をゆくは八尾表より河原  
西の川一面の境をけり長吉村のわり二十村あり  
能吉村進むと退せしゆりきりし河原をけり  
見れば八尾より久実寺との間の橋を度小二百百り  
二にう所へ村をてし久実寺へ引く物くおきしはそと  
長吉我れは程かきととてけりちてい合とてけり  
能吉村のわりし人村と兼りてい合とてけり  
八尾の川一面の境をけり長吉村のわり二十村あり  
能吉村進むと退せしゆりきりし河原をけり

長吉の能吉村のわりし人村と兼りてい合とてけり  
八尾の川一面の境をけり長吉村のわり二十村あり  
能吉村進むと退せしゆりきりし河原をけり  
見れば八尾より久実寺との間の橋を度小二百百り  
二にう所へ村をてし久実寺へ引く物くおきしはそと  
長吉我れは程かきととてけりちてい合とてけり  
能吉村のわりし人村と兼りてい合とてけり  
八尾の川一面の境をけり長吉村のわり二十村あり  
能吉村進むと退せしゆりきりし河原をけり







海と岸一士年と於下は山崎の如く〜我亦不物う  
高く此を今もあふ敵を討つ〜  
〜と後より〜長谷我討つ討留て〜  
〜  
中事

本村長門と後陣の長谷我討つ〜  
とばゆ知者口入を救と下事と物候り〜  
〜  
將軍は伊藤天淵は下合れ廟のり馬下〜  
〜

續開談

大將は於馬下〜  
〜  
の馬下あり〜  
家の合の廟のり馬下〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜



味方もあつてはきとあつてぬとさういふことと云ふは  
必貴と云ふかゝつたれと云ふことと云ふは  
軍一と味方とつ列のことと云ふは  
色取と云ふことと云ふは  
それと云ふは  
さしと云ふは

大坂覚書

若口とおも磯川の川堤と築地と云ふ十段堤との次  
先と日友信十郎山の上島名と次長門旗本浪の常白  
此馬下たるは本村と針海と云ふは長門川堤の上り

川堤へ物見の侍歩久間あつて馬と云ふは  
是れと云ふは西郡の方と云ふは  
の年の古れ指ゆと云ふは長門能乃と云ふは  
可成と云ふは長門川堤と云ふは  
知れと云ふは  
味方若者と云ふは西郡へ  
一は平塚川と云ふは  
と云ふは  
此方長門川堤と云ふは



羽織はくし麻を所持し

西郡北友堂人敷ととをく相をよは長門親書末七兵衛五言  
切さきの括めりて赤き一巻く首をすし長門親書末七兵衛子乃  
實一米をそ白紙子羽織合れし帯乃腰指十字字に  
滄少く多留乃りまをくまをく一巻掛赤長門人敷多  
けりて押を赤れを羽七活く御おとし馬竹端とし馬を  
討負は長友堂言書しゆり負取く首ととてしはれは  
家本等川後五兵衛乃合尚の取とけりて言若をゆけ  
近くくもいふ所計少く果しは長友堂人敷取軍書

よ月長門親書を平きまゆ久同書人五川流きま松森  
市を長平礼彦之御作友八五兵衛山中庄ゆは同書書  
名は吉田武右衛門兵衛のしと長友堂内田中内書えと滄と  
合をくのと御討うぬはうり田の中へ長内書えと首を丸  
しはらぬ御討うぬ名をぬきさう年堀お備長友堂書  
長進の書をとめり一所くまをひしはらぬの内を名に  
まをくこの負とまは長門書書かへせりははらぬ  
はらぬ中の中らぬ

東勢二れりえ井御掃部とあは津光六日の御送明















いぬをこゝて殺すにまけり  
家康公取之由りて

刀をこゝと持りて横田村にたると何と云ふ横田はうゝ遊撃次

しつゝは和歌山と云ふ敵を遠征せしむと遊撃次と云ふ

と云ふ和歌山と云ふ敵と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

横田と云ふ和歌山と云ふ敵と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

横田はうゝ遊撃次と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

て是を本入横田と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

いゝに能くすゝたゝゝ和歌山と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

ぬの事と云ふ也と云ふの事と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

け也まにやいゝと云ふ事あり和歌山と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

と云ふと取之と云ふと云ふ事あり和歌山と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

神立ちり武田と云ふと云ふ事あり和歌山と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

後星の遊撃次

大坂覚書

庵原由右衛門長政十五郎之補ふをりり知りて彼の

配と云ふ事あり和歌山と云ふ敵と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

はうゝ和歌山と云ふ敵と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

ゆたの魔と云ふ事あり和歌山と云ふ敵と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ

除くゝて和歌山と云ふ敵と云ふて横田はうゝ遊撃次と云ふ























人許の様に具言言上は下は後助と云ふに何れも知らぬ  
子方おぼく御ありと親の事とて此事はいつては  
心入つてしやと尋ねては誰とてし子方度  
計也若し内友信十郎今年廿二歳とてわしと考ねて  
乃ち終つては後助とて後助の御前とて  
防我終つては此は信十郎の御前とて  
乃ち一ヶ月の金銭とてとてしとては後助の御前  
とてしとては長門組の御前とては信十郎の御前  
とてしとては信十郎の御前とては信十郎の御前

長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前  
類の上の事とてしとては信十郎の御前とては信十郎の御前  
麻毛の事とてしとては信十郎の御前とては信十郎の御前  
長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前  
長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前  
長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前  
長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前  
長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前  
長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前  
長門組の御前とては信十郎の御前とては信十郎の御前



と改りてにわ百若英と不為世間之困人として再上りて後  
病歿はり事

と見えおれり人の内川と山口海舟と人のと改りて果ては  
をゆゑの帝は年深遠し師の首と打候候と侍のたまはく  
りし身は原由助と云ふ事候し入首とおめり果ては白坂  
河内ゆき進へ実地れ果ては口の内はよむを教へかき入る  
貴しははつてさきあり種をゆへはは獲かたり乃は人  
はれ持候事候し一書と名林と命候は赤坂前津と云ふ頁  
中事候し川と始末と云ふ事候しは板掛と云ふは此の後

しは妙者なりと原由助と云ふ事候しは六人の事候しは  
八田今十郎一書候しははり事

長門左衛門村と云ふ事候しは林をといふ事候しは林を  
の者をいふ事候しは川の考へしは夜浪人若田徳也と武官の者候し  
は林をいふ事候しは林をいふ事候しは林をいふ事候しは林を  
能中と云ふ事候しは林をいふ事候しは林をいふ事候しは林を  
可はしと云ふ事候しは林をいふ事候しは林をいふ事候しは林を  
実候しと云ふ事候しは林をいふ事候しは林をいふ事候しは林を  
乃と云ふ事候しは林をいふ事候しは林をいふ事候しは林を







見之ニ家臣武功ノ者氏久世カ今直叅ニ成タルヲ心ニ妬テ  
其所ハ鍊炮獨倭危キニ只疾ク帰ラレヨト云久世諍ニ乘廻  
テ昔ハ柳原家ニ城ト寄手ノ旗先ノ行逢程仕寄候是ハ其間  
イマタ遠キニアヤフマレ候ヤ昨今マテ貴殿ナト、肩ヲ並  
ヘ膝ヲ組テ親ミシ時ハサモ無リシヲ臆病神ハイツノ間ニ  
付タルヤ旗本ノ者氏是ホトノヲ何トカ思ハント云ケル  
ニ答ル者ナシ

武田咄聞書

柳原を州 友田能也七日の節は... 洛陽の事と  
収りし終る、遠州、藤原、高知、以後、六日、若くは柳原

軍は辰

公清年、柳原家を村と市田中村、木村

長門と井原の戦の時一突、柳原、今、軍監の藤田

頼り、制、一、後、今、軍監の藤田

水井止勝を、友田、今、軍監の藤田

公乃、藤原、今、軍監の藤田

言、今、軍監の藤田

長、今、軍監の藤田

と、今、軍監の藤田

は、今、軍監の藤田

藤堂家  
老モ出











































ル由被仰候

川野權右衛門取來首ヲ

權現様御意見成首也髮ヲ

カヒテ見ヨト被仰候ニ付白候得共香無之也首キレイナル

ナリサカヤケ半カウニテキレイニソリテアルトナリ

河野權右衛門祖父庄左衛門其子權右衛門大坂後ノ御陣六

日河内星田ニ

權現様御在陣

台徳院様ハ河内

スナニ御在陣星田へ御使ニ敵出候故

將軍様御出ノ

由申來高木九兵衛

後筑後守

久貝忠三郎

後因幡守

御使ニ叅

權

現様御出候テ野ニ御待

將軍様御待候處ニ井伊藤堂

ヨリモ左右不申來内ニ緋ニ金ノ丸ノ指物ニユル誰カト也

本多上野公ニ逢度ト也上野公逢河野權右衛門也我等久敷

御勳氣候也手ニ逢候由申上

權現様則被召出御叱不

被成候ト也能首取來ル此時藤堂ヨリ百五十首來ル内ニ權

右衛門取首能首也ト云云親庄左衛門七十計泪ヲ流シ悦候

ト也掃部頭ニ此由申度トテ御暇申是ヨリ御勳氣御免也

權現様ハ夫ヨリ平岡へ御帰候ニイカニ

御親様ニテ

モ御備ノ中通スマシキ杯ト申者多シ上野公怒御供無之迎

無理ニ御通候ナリ其内木村山口尤馬首ナト來ル也其夜ハ







仰山ノ上無分及系とありしを  
大所所様ハ遠見

あり世よりありしを  
正野ノ少子無分及

系上よりありしを  
海河見向をせし方と

親の更らふをせしむ  
若くは上とせしむは

とありしをありしを  
毒ハ好むは御書と

はるしむのハ首尾よりありしを  
の上言とありしを

るむとのとありしを  
毛利と田とありしを

ありしを運ばし方ハありしを  
長多我流とありしを

ありしをありしを  
之思をありしを

ありしをありしを  
の書とありしを

ありしをありしを  
上総分ありしを

ありしをありしを  
右の後のありしを

ありしをありしを  
將軍様ありしを

ありしをありしを  
跡中野馬ありしを

感狀記

大坂ノ役ニ松平上總介忠輝陣ヲ取タル所ニ敵又大軍ニテ

來テ陣ヲトル忠輝欲戰アル人諫テ曰我客兵ニテ未地形ヲ

不諳且敵ノ師幾ト云莫ヲ知カタミ粗忽ノ戰ハ不可ナリ諸

部能謀ヲ合セテ不危シテ勝ニ不如ト忠輝從之其夜ノ内ニ



敵引取テ忠輝年ヲ空フス是敵ノ陣ヲ取シクト早ク引退ト  
ノ形ヲ不辨ニ依テナリ常ニ亦候ノ功者ヲ用ユヘシ

勇士一言集

水野日向も及ぬく度田候も及ぬく者ありしも  
勤者たりしも又坂陣も見たりしも公勇士の首を  
見たりし入りの日向も及ぬく時海軍も及ぬ  
りし推素も及ぬ本も及ぬ時海軍も及ぬ  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推

日向も及ぬく度田候も及ぬく者ありしも  
勤者たりしも又坂陣も見たりしも公勇士の首を  
見たりし入りの日向も及ぬく時海軍も及ぬ  
りし推素も及ぬ本も及ぬ時海軍も及ぬ  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推  
りし海軍も及ぬ日向も及ぬれりしと推

明良洪範  
長曾我部盛親泰ノ川勝カ末ニメ泰ノ姓川勝ハ昔



天王ノ御夢ニ人有テ臣トナラント願フイカナル者ソト夢  
中ニ尋サセ玉フニ秦ノ政ト申ケル故時ノ博士ニ仰テ政ヲ  
問ハル、ニ始皇帝ノ諱ノ由ヲ奏聞ス其比和泉川ヨリ甕ヲ  
捧ク此甕河上ヨリ流出シニ壺ノ中嬰兒ノ候ヘハ奉ル由奏  
聞シケル程ニ其夜ノ御夢ヲモ思召合セ其嬰兒ノ姓ヲ秦ト  
賜リ諱ヲ川勝ト付サセ玉フニカノ原口キテ流ル、ト讀ル  
モ此縁ヲトレルトカヤ八耳ノ皇子ニ習学ノ廣隆寺ヲ開基  
今ニ浴外ニ太茶トテ此舊跡アリ子孫多ク隨身ニ下リ  
禁庭ニ候ス川勝甕ノ中ニ有テ河上ヨリ流出ル處疑之人多

シ太公望カ釣傳説ノ例共ニ疑人アリ遠キ昔ハ不知寛永年  
中出雲國ノ守松平出羽守直政吾領分巡見ノ時アル田ノ中  
ニ掘残シタル古塚アリ一本ノ古松有直政心ニ叶ヒケレハ  
所ノ老長ニ尋ケレハ古ヨリノ古塚何ノ申傳モ無之ト答フ  
此松陰ニテ田地枯作ニナリ松ハ木フリ能レハ堀セテ塚ハ  
カリヲ置ヘシトテ人夫ヲ掛テ其松ヲ堀取ケルニ堀穿ナタ  
ル穴ヨリ水ノ流出ルヲ瀧ノ如ク押流ス水ニ浮テ嬰兒ノミ  
エケルヲ拾ヒ上置直政百姓ニ申付乳ノ多キ者ニ養育申付  
ルニ大ノ男ニ成シカハ頓テ歩行ノ者ニ呼出シ江戸往來ノ



供セシカ悪性ナル者ニテ許サレ難キ丁アリテ成敗セラレ  
ニケリ昔ハ寶誌朗辨義淵異生ナル人々モアリシカ良智人  
ニ付テ成立タレハ良智天下ノ明匠ト成ル出羽守モ能人ニ  
付置ハ何ソ悪人ト成ルヘキ人ハ善悪ノ友ニヨルトノ謗違  
ヘカラス川勝ノ外ニモ如何程モ日本ニモ異生ノ人アレハ  
不審スヘキ丁ニ非スト物知レル人ハ申セシ也

又曰盛親大坂へ籠城ノ意ハ大閤秀吉公ノ大恩ニテ父土  
佐守信親家ヲ興セシ其志ヲツキ籠城シタル人故御敵ハ  
申サレタレ氏其志ヲハ歎稱セラレシト云慶長五年石田

三成ニ荷檐ニ依テ土佐ノ困ヲ除カレケルカ久シキ名家  
ト云ヲ惜ニレケルカ強テ御咎メモナク京都ニ浪人メ十  
餘年ヲ送ル慶長十九年秋ノ比ヨリ雜説多ク世上次第ニ  
サワカシキ様子ニ付板倉勝重長曾我部ヲ氣遣ヒ一町ノ  
商家トモニ下知ノ一町へ預ケル程ニ町人共昼夜誥詩歌  
或ハ茶會トテ適レ出ヘキ間ナカリシ時家臣トモ相談ノ  
茶會連歌ト云町人ヲ多ク呼ビ毎日數十代傳リ持ル繪賛  
類歌書茶器武具等取散シ見セラル是ニ町人共目ヲ悦シ  
メ心ヲ棄ハル珍財如是取出サルハ他行ノ念ハナカル



ヘシト油断サセ其虚ヲ伺ヒ立出ル閑所へ行ト見エテ舊  
臣相画マシタリケン盛親ヲ取ニカス勝重へ訴フ是ヲ聞  
勝重臍ヲカム大坂表矢尾ニテ藤堂高虎ト戦フ高虎カ軍  
將六人迄討取ル内ニ勅解由ヲ長曾我部主水討取ル勅解  
由カ義士勇カヲ感メ甲ヲハ子孫ニ傳ント取持ケル落城  
ノ后モ家臣一人召連八幡邊ニ忍フ時モ右ノ甲ハ隠シ置  
ヌカ、ル所ニ蜂須賀阿波守至鎮カ臣長坂三郎左衛門カ  
為ニ生捕レニケリ京都へ召寄セラル、時番兵ニ申サレ  
ケルハ我今度ハ是非討死ノ第ト存ヘキニサアラヌメ退

ハ信親秀吉公ノ厚恩アリ依之今志ヲ継キ籠城ス其上藤  
堂勅解由カ勸敵ナカラモ諸平ヲ勵シ下知シタル躰晴ナ  
ル討死其志ヲ感スル故勅解由カ甲ヲ持セ置ハ一度子孫  
へモ傳ヘ高虎ニモ傳テコソ兔モ角モ成ヘケレト一先大  
坂ヲ落タリ亦秀頼へノ吾義戦矢尾ニテ濟タリ関東へ深  
ク敵スル故モ根ナルトナシ依テ一戦シテ直ニ城中ニ不  
入大坂ヲ退ク早ク命ヲ召レ候ヘ  
家康公ノ仁情誠  
ニ無双ノ良將ト云テ詞ナシト云此家系ハ古土佐国長曾  
我部ト云所ニ秦氏住メ其近境ヲ領ス是始祖ト云長曾我



















乃者夫と云は殺と成し一おま下りしは言々たあの者た  
はは用し事いれし御身佐信も昨日一は海は海  
をよし中幸と成りて西人の方へ向ひて花明のいそ  
と成りていそと成りて道の上言々し

將軍様と云雜

誤と成りしは通言花より下り信をいそ西人の佐信右と成  
や其はのし行も及ばぬひしけ言々西に御身より下り  
唯るをいそし一は御身の國を指し言々の佐信右と成りし  
し一は言々も成りし事いれし御身より下り一は言々も成りし  
これと成りし事いれし御身より下り一は言々も成りし

かりたる行せし 西所は隠しに成りし事いれし

のし一は言々も成りし事いれし御身より下り一は言々も成りし  
と成りし事いれし御身より下り一は言々も成りし

御上より

御身の國をいそし御身より下り一は言々も成りし  
のし一は言々も成りし事いれし御身より下り一は言々も成りし  
を御身より下り一は言々も成りし事いれし御身より下り  
一は言々も成りし事いれし御身より下り一は言々も成りし  
ち一は言々も成りし事いれし御身より下り一は言々も成りし  
ゆ多し向ひし御身より下り一は言々も成りし事いれし御身より下り







口乃事あり

大所所様の抄横巻と被し一也西口の住云

とんく掛を臨事海の上総の大多重(ゆ)きて大坂略記  
せけり家君河見と一誰く物と並へて平しく物言詞と書けり  
る事よけり加友おたぬ大坂の足高者平の事向祥七書  
このゆよと物言詞は書見下の中小中野勘解由中か事書侍の談  
場に向い誰方てうて即と命と惜とあ者やてとむりあを  
て事書明らむ多事其世書とあててま田毛利と事侍田事  
物言詞は惜思ひ言ふありて道明寺へ我誠兄の英世とよけ  
る事書明らむ多事其世書とあててま田毛利と事侍田事

乃事とは唯とく乃以二人の謂に向ひ今日大坂略と討留不  
中事と多事其世の名りありて向後とくく武志のゆ祖文中  
書と事ありて一はあむ事其世書とあててま田毛利と事侍田事  
石者と事其世書とあててま田毛利と事侍田事  
と事其世書とあててま田毛利と事侍田事  
人たてり事其世書とあててま田毛利と事侍田事  
ニツ也事其世書とあててま田毛利と事侍田事  
何所とて事其世書とあててま田毛利と事侍田事  
しちに夜と事其世書とあててま田毛利と事侍田事



六部を庫後神米女持村に信願安持持せし約と一合に  
押さし天王寺口へ押し夜中へ四里押して夜有方へ天王  
寺表へ押せり又云々朝おききち打ま利由のまの正し麻  
乃角一乃角と小姓大赤長ぬ舞あし三つとせしれしおき  
之用しし三々々例の合れしたりしおけし合致ありしを  
くくしてさるる一たつ時をも所件の際の角三つおきしお  
しきくしお神くし中夜火小右打つおけし

加賀流前より利を出せしに三浦身は山山一つ向とくそ外  
煎軍勢と七日の曉く海くと打ま山山の加賀加賀勢一の

とくは二のめと一いり多入喝か友たる聖田筑前右のめと  
石川修三と前田格とゆり多進及片桐市と國之勝と友徳馬  
ちゆ多と後とたのめと一方赤と和泉御川中井は持進之  
將軍様は語むのめと水野年人といま山泊を松平中へま  
い水は部の中へ力た進と井大炊酒井雅樂及び多佐後と  
との次 將軍様は語むし水野年と友友對らるる  
大と寺に品とくはあままきくお海と田の内を足并持村  
に膳頭安持はも松平石見清井宋女村田堀り押後とらるる  
松平丹波と海井石見佐藤系をい福後松平素子の照は後田



徳川と和田と云ふ山並系多に痛回修繕す曰く入道内友等力  
以年亦房より松平甲斐守中津波にわき木を浮揚せし御料運出丹波  
を併に其の仙石多に細川主筆原、備と云ふ所迄中島と  
伊勢廻の又於此多美濃美濃の又於此松平中津波より伊勢  
美濃の軍をを以加へていんを以伊勢美濃宗押談て誠前  
少於殿に水野日向を固大和廻り乃向く、(小津守之殿乃宮内省  
中津波より伊勢廻り)の専断を責重くあつて伊勢  
てより自らも伊勢廻りのいんを以伊勢美濃宗押談て誠前  
は伊勢乃伊勢を以伊勢廻り乃向く、(小津守之殿乃宮内省  
中津波より伊勢廻り)の専断を責重くあつて伊勢

徳川と和田と云ふ山並系多に痛回修繕す曰く入道内友等力  
以年亦房より松平甲斐守中津波にわき木を浮揚せし御料運出丹波  
を併に其の仙石多に細川主筆原、備と云ふ所迄中島と  
伊勢廻の又於此多美濃美濃の又於此松平中津波より伊勢  
美濃の軍をを以加へていんを以伊勢美濃宗押談て誠前  
少於殿に水野日向を固大和廻り乃向く、(小津守之殿乃宮内省  
中津波より伊勢廻り)の専断を責重くあつて伊勢  
てより自らも伊勢廻りのいんを以伊勢美濃宗押談て誠前  
は伊勢乃伊勢を以伊勢廻り乃向く、(小津守之殿乃宮内省  
中津波より伊勢廻り)の専断を責重くあつて伊勢









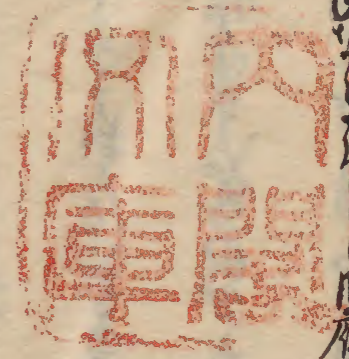






武徳成業卷之六十一終

源一乃成んをくあて細工の上の口をいれしと書きたり



武徳成業卷之六十一終



